

医師としての刷り込み現象



漢方医学講座 准教授
(63回)

渡辺 賢治

現在漢方医学を専門としているが、内科時代に受けた教育の恩恵に日々感謝しながら診療をしている。現在奉職している慶應大学病院の漢方クリニックには、ありとあらゆる疾患の患者が訪れる。治療としての漢方の腕も問われるが、同じような比重で問われるのが診断能力である。他科にて診断された上で受診する患者もいるが、漢方クリニックを直接受診する患者も多い。このような場合、適切な診断を下すことが要求される。亜急性甲状腺炎、末端肥大症、伝染性単核症、グリオーマなど多岐に亘る患者を診断しなくてはならない。末端肥大症の患者はうつ症状を主訴に受診された患者であった。また、漢方クリニックには冷えを訴えて受診する患者が多いので橋本病、膠原病もよく見つかる。

医師に求められるのは高いレベルの診断技能を基礎にした「治す」能力とコミュニケーション技能を基礎とした「癒す」能力である。こうした能力を身につけるためには、医師としての初期教育がいかに重要かをつくづく感じる。われわれの頃の初期研修はそれこそ週80時間以上勤務で月給は2万5千円の時代であった。慶應での研修は受け持ち患者数が少なく勉強にならない、などと批判されていた。しかし3-4人、時には一人の患者とじっくりと向き合っ

て図書館に行き、物を考え、勉強する時間は十分にあった。医師になりたての頃はこれが物足りなく感じたものである。しかし3年目に足利赤十字病院に出張してから、この「患者と向き合っ

てじっくりと物を考える」ことが如何に大事かを思い知った。他大学で研修した医師は手技には長けており、ルーチンの仕事は速いが、患者さんの細かな変化やそこで起こっている事象に対して淡白であるのに対し、慶應で研修を受けた医師はどんな細かなことでも見逃さない習慣が身につけており、常に疑問を持って対処していた。

幼鳥が孵化して初めて見たものを「親」と思うようになることを刷り込み（インプリンティング）という。医師としての一生は初期研修時代の刷り込みによることが大きいように思う。慶應の内科が内外から高い評価を受けているのはこの初期教育においてすぐれた伝統を持っているからであろう。

オーベンから教わったことは今でも頭に叩き込まれている。時に厳しく、時にやさしい多くの優れた指導者との出会いが現在の自分を支えてくれていると感じる。ただ漠然と患者を診ることを許さず、そこで何が起きているのかを常に考える習慣を身につけさせる、これこそが慶應の伝統であり、慶應の医学教育が目指す“Scientific Physician”を育成する基盤となっているのであろう。初期研修制度が刷新されわれわれの頃に比べて待遇は信じられないほどに改善された。しかし何物にも代え難い慶應の初期研修の伝統は継続して行って欲しいと願っている。